



承継

Project

File.06

関西統括京都本部

川島 康生
川島 延之

Yasuo-Kawashima

美容室創業とSPC

理容室を営む父母のもとに長男として生まれた康生さんは、高校在学中に夜間学校に通い、インターンを経て理容師免許を取得した。当時はビートルズの流行で男性も長髪ブームとなり、その後はさらに美容学校にも入学。それまで美容師とは女性の仕事だったので、彼は美容学校の第一期の男子生徒となった。その後は美容の技術を磨く為、流行の最先端に行く横浜の地で多店舗展開をする有名な先生のもとで、5年間修行をした。

修業時代に出逢った女性との結婚を機に、27歳の時、地元の京都・山科区に戻って夫婦で8・5坪の美容室を出店。セット面は3面で、男性にも来て頂ける「ファミリィサロン」がコンセプトだ。

独立出店から10年が経ち、修行時代から夢見ていた「多店舗展開」をしようと、経営の勉強をすべく自らSPCへ出向いた。そしてメディアモード会員となり、目標となる先輩を見つけ、組織で勉強に勤しんだ。

慎重な彼は、2号店を出店するのに5年という歳月をかけ、正会員には10年の時を経て昇格したという。SPCには情報が溢れ、学びがたくさんあった。仲間から発破をかけられる事も多々あったが、彼はいつでもマイペースを崩さなかった。

「正会員になるのは、2号店を成功させてから！」と決め

ていました。繁盛してもいいのに、現場を抜ける気はなかったのです。SPCで大切な事は『流されない』という事です。2〜3店舗やると、テングになつてしまふ人が多し。自分の器以上の事をやると、必ずコケる。勢いで出店して、ダメになつて借金まみれで去つて行つた人をたくさん見て来たから。しかし石橋を叩き過ぎて、叩き割つて、多店舗展開できない人は、そこで夢が終わつてしまふ。集団に流されず、最後にはしっかり自分を持つというのが一番大切です」と彼は言う。

また、彼は美容室を営む傍らで、平和堂スーパーの専門店の副理事を務めていたという経緯があり、そこでネイルやエステなど美容業態の変化において情報をいち早くキャッチしていた。業界内の情報はSPCで学び、業界外の情報も仕入れながら多角的に学びを得て、「美容室の敵は美容室ではない」と、広い視野を持つ美容経営に臨んだ。

かつて平和堂のSC事業部の部長を務めていた秋野氏という人物を、彼は「人生の師匠」としており、秋野氏からはいつも「人生の階段に踊り場を作れ」「山高ければ、谷深し」と言われていたそうだ。これらの言葉は、一気に駆け上がる何かがあった時、落ちていくのも一気だという意味だそう。この言葉を胸に、彼は自社の展開を慎重に進めていった。



Nobuyuki-Kawashima



価値観が違って、 同じ方向を見つめよう。

多店舗展開と人材育成

現在、美容室6店舗(内FC2店舗、カフェ1店舗)を経営しているが、ここに来るまでにはエステやフォトスタジオなど、様々な試みや出店があった。過去を振り返り、康生さんが経営で一番苦労して来た事は、やはり「人材育成」だったそうだ。

創業時の古き良き徒弟制度のような「人を育てる時代」を経て多店舗展開をしたことから「カリスマ美容師ブーム」が到来した。仕事が出来るスタッフは引き抜きが絶えず、業界全体が「ヘッドハンティング」を競い、人材の使い捨てが激化したのである。そんな時代背景からか、なかなか人が居着かず、一時はプロのコンサルタントを入れて社内での統率を図った事もあった。

「SPCで正会員になって、そんな悩みをいろいろの人に相談しているうちに、社員が辞めていくのを社員のせいにしてしまうのはダメなのだ」と気付きました。原因は経営側にある。辞めて行ったスタッフに対してではなく、残ってくれているスタッフに感謝の気持ちを持って、『辞めて損した!』と思われる会社にできるよう、自分が努力するだけです」

と康生氏は語る。

後継者づくり

康生さんには2人の息子がいる。長男は最初、美容の道を目指したが、途中で飲食業界に入り、今ではラーメン店を独立開業し

ている。次男の延之さんは美大に進学を希望していたが「芸術家として食って行ける人なんて数少ない。美容師だったらデザインでカリスマにもなれる!」と父に説得され、高校卒業後すぐに「他所の釜の飯を食って来い!」と、父の勧めで本田歴代のお店に就職し、通信で美容師免許を取得しつつ、7年間修行を積んだそうだ。

延之さんが自社に呼び戻されたのは、会社の急成長期であった。父が出店と組織活動に精を出す中、彼は3年間スタイリストを務めた後、店長に就任。社内でも「箱」と「人」とのバランスを取るのに苦労が絶えなかった。

康生さんは、それまで社を支えて来てくれた主要スタッフと、後継者として戻って来る息子との衝突を避け、FC展開を始め。しかし父と息子の間で、想定外の衝突が始まって行く。

「父からしたら『せっかくお前の為にFC独立支援をして統制を取り易くしたのに...』と思ったでしょうね。父と僕とは、あまりにも『ゴール』の価値観が違っていたのです。父はスタッフが伸びるステージを作る為に、店を出すのがゴールになっている。でも自分は、出店した店を繁盛させるまでがゴールだと思っているので。店が軌道に乗って来て、やっと社員たちに還元できるかな」というタイミングで、父が新しい箱を作るものだから、内部充実をさせたい自分からすると、それはとんでもない事で、毎回大ゲンカになっていました」と、延之さん。

「はっと見、温和な親子で、今となつては想像もつかないが、彼らにも不仲な時期があったのだと思う。」

人間形成と器づくり

「ダイヤモンドはダイヤモンドでしか磨けないように、人は人によつて磨かれる。」

康生さんは後継者として息子を鍛える為、延之さんを店長時代にSPCに入会させた。「父から『たまに息抜きに来なさい』と言われて入会したのに、フ

タを開けたら全然『息抜き』でもなければ、会議は週1で『たまに』でもなかったですわ...」と苦笑いする、延之さん。

さらに、康生さんはこれまでSPCで学んだことは取捨選択して自社に落とし込んで来た為、社の中でSPCという組織が何をするとどうなのかを理解している者は皆無であった。上司からは「SPCの報告を上げろ」という指令も下されたが、まさか「会議の後はいつも呑んだくれてる」とも言えず、上司と父との板挟みで数年間は辛い思い

ばかりしていたそうだ。

入会から3年程経った頃、延之さんは本部のコンテストの実行委員長を任された。初めて組織で責任ある任務を任せられ、その内容も社員たちに分かり易い活動だったので、彼はようやくSPC活動を楽しむことが出来たそうだった。

現在では全国企画情報部の副部長を任されているが、それまではずっとコンテスト関連の役職に従事して来た。これまでの組織活動を振り返って彼はこう語る。

「SPCを辞めたいと思う時期もありましたが、その時は肩に力が入り過ぎていたように思います。真面目過ぎたからこそ、言われる言葉を真つ直ぐに受け止めて、しんどくなっていたのだと思います。今は少し力も抜けて、伸び伸びさせて頂いています」

また、SPCでは父の愚痴ばかりをこぼしていたそうだが、康生さんに恩を受けた仲間達が諭してくれたり、父の想いを仲介して伝えてくれたりと、たくさんさんの救いの手を伸べて貰ったそうだった。照れる気持ちもありな

がら、彼の中には徐々に父への尊敬や感謝の念が生まれ、その関係も変化していったのである。

「正直なところ、SPC、イヤになることもありますが、父だつてそうだと思います。ある時、父に『そんなマズい酒飲むくらいなら、辞めてしまえば?』と言った事があるんです。そしたら、父、泣きながら『受けた恩があるから辞められない!』と言ったんですよ。本当に不思議なところですが、SPCって」

事業承継

3年前の2015年、自社が35周年を迎え、社長業は延之さんにバトンタッチされた。現在は諸々引き継ぎ中で、40周年には父に完全に引退して貰えるように進めているそうだ。

その社長交代劇も、半ば強引に延之さんが実権を取りに行つたというから驚きだ。

「父が自分の意見も聞かずに出店を繰り返す中、カフェまで始めた時に『もう自分が居ても意味が無いから、会社を辞めます』と脅したんです。副社長という立場に居ても、父の無茶を食い止められない。結果を出せる気も、社員を守る気もしなかったんです。だから早く舵を取りたかった。『会社を任せて欲しい』と嘆願して、『じゃあやってみろ』って事で社長にして貰ったんですが、今ではだんだん『父には勝てへんなあ』と実感しています。うちには出戻りのスタッフが多い会社で、その最高職がFCオーナーです。出戻りなのに、そこまでさせて貰えるっていう社風は、父の味だと思います。父は自分より能力の高いスタッフを側に置いて使う事ができるんです。普通、それって嫌がるじゃないですか。そういう勝てない部分を受け入れて、父を責めなくなつたんです。父のやり方でグチャグチャにされて来たと思ひ込んでいたけれど、排除するくらいだったら、父の能力に自分の能力を足した方が結果が出るのが早いんじゃないのかな...と。父を責めたところで、過去を否定する事にし



おやじには、

勝てへんなあ。

かならないので、だったら2人で未来を作ろうと考えられるようになったんです」

カフェの事業についても、「食」という字は『人』を『良』くすると書く。SPCの食事会もそうだけれど、言いたい事を言うて、人を良くする場です。だから挑戦してみた。長男も飲食店を経営してますが、人を良くする仕事って素晴らしいでしょう」と康生さん。こちらも父の想いを繋いで、順調に運営している。

次世代に託すもの

「引退」という言葉を前に、少し寂しくもあり、息子の勇姿に心強さを感じている康生さんから、最後にこんな言葉を頂いた。「僕はね、京都本部ではいじられキャラで通っていて、いつも人の顔色を伺って生きて来た『ダメ男』なんです。小さい頃からいろんな事を諦めてばかりいてね。でも、心のどこかでは『いつか見返してやる!!』と思っていた。俠気がないとか言われてもね、最後は自分らしく勝負を掛けて生きたいな、と。僕は自分の親父を尊敬していて、自衛隊に床屋の出張所を出したり、床屋を辞めてからも警備員なんかをして、子供になんぼかお金を残してくれていったんだよね。だから僕も、何かを残せる人物になりたいな、と。お金を残すのが難しい時代になったけれど、息子にとっては『出来過ぎない親』だか

ら、継ぐのも楽な部分があるでしょう。そして、『出来過ぎない自分』だから『出来るスタッフ』だけは残せた。人に任せる事を覚えて、それに対する感謝する気持ちを持つ。社員や周りの人に感謝する事で、自分も感謝されるようになる。『感謝力』を身に付けて欲しい。そして、『縁』を大切にしたい。結婚して子供が出来ても家族として受け入れていけるように。人生レベルで何人の人と付き合えるか、それが僕の一生の課題です。息子は組織でも自社でも、自分が出来なかつたことに挑戦してくれている。引退するのは寂しいが、息子の頑張る姿は、ただただ嬉しい。もう、手法で上がって来た時代じゃない。人としての在り方が大事な時代です。この人について行こう！と言われる人物像になって、リーダーシップ力を身に付け、歩んで行って欲しい」

受け継ぐべきものは、目に見えるものと、見えないものがある。自社も組織も、その見えないものを心でしっかりと受け止め、明日に繋ぐべきなのであろう。

(有)ビッグウェーブ

〒607-8160
京都市山科区榎辻東浦町33
TEL 075-581-5558
H.P. www.e-hairs.jp

